



只野とよ子さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：4月3日

元気で働ける、学校に通えるということが、今は一番です



▲「100枚もの手づくりの心温まるご支援でしたので、頂いたお手紙とセットにして、全世帯に配りました」と、昨年度、自治会長を務められた只野さん（今年3月31日に退任）。北海道、帯広市のご家族から郭内公園仮設住宅に贈られた「はり絵」の葉書を持って、微笑んでくださいました。

「あの日、津波を見ても信じられなかったし、信じたくなかった」と只野さんは話し始めました。

「家族を失った人たちのことを思うと、今回の災害や事故に対して悲観的になったり、周りを非難したりするのではなく、自分たちの出来ることを精一杯しながら、前向きに進んでいきたい」とおっしゃる只野さんには、「母は強し」という言葉が良くお似合いです。

■次男の命が助かったのだから、やり直せないことなんかないはず
あの3月11日は中学生だった次男の卒業式で、私は仕事から戻り自宅にいました。家には義母と高校生の長男が一緒でしたが、次男は海から1分くらいの友人宅に遊びに行っていました。大きな揺れや次々に落ちてくる瓦に危険を感じ、3人で避難しようとしていたのか車の鍵が見つからず、その上、次男が気がかりでしたが、約1・5km離れた小高い丘に建つ小学校を目指して歩き出したところに、近所の方の軽トラックが通りかかり、便乗させて頂きました。小学校に着いても次男の姿は見当たらず、一旦丘を下ってみると、目の前まで海の泥や瓦礫が押し寄せてきていました。もう9割方だめだと思いましたね、津波に遭ってしまったのではないかな。でもお友だちのお母さんはしっかりした方だから一緒に避難しているかもしれない、などと思いながら、地面にひれ伏して泣きました。長男が避難所まで探しに行ってくれましたが、その間、何度丘を下ったり登ったりしたでしょうか。別の避難所にいた次男を長男

が連れて戻り、4人で無事を確かめました。あの時ほど私が母親を実感したことはなかったですね。その3時間後に夫も無事に戻り、家族全員が揃いました。その1週間後に自宅を見に行きましたが、津波に遭った1階は見事に柱だけでしたが、家族みんなが無事なら、家ぐらいいいよと思えましたね。
■ふるさと浪江の近くに帰って、翌日に起きた原発事故からの避難は南相馬市から福島市へと紆余曲折を経て、二本松市郭内公園仮設住宅に入居しました。震災当時、既に東京に住んでいた長女や2人の息子はこの春から就職と大学進学で家を離れ、義母と夫との3人暮らしになりましたが、亡くなった親戚やいとこ夫婦の分も、強く生きていきたいと思っています。
義母も元気で、身体のためにと霞ヶ城やこの周りの散歩を欠かしません。避難生活も4年目を迎えて、出来ることならば2、3年後には双葉郡広野町辺りに移りたいです。義母と一緒に小さな畑をしながら、子どもたちが時々帰って来る、そんな穏やかな生活が出来ればと願っています。

浪江のこころ通信



・第35号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第35号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





中西總一郎さん(田尻)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：4月7日

災害や苦労をチャンスに変えて

中西さんは、山形県南陽市に避難されていた平成23年7月から二本松市に営業所を開き、測量設計の仕事を手早く再開されました。

一緒に山形に避難していた奥さまや娘さんと生後間もないお孫さんは、一時、中西さんの友人のつてによって長野県東御市に避難されていましたが、平成25年3月に、娘さんたちは嫁ぎ先のいわき市に戻られたそうです。

今、中西さんは相双地区と二本松市等を営業範囲として、事業を行っていらっしゃいます。



▲「有限会社 中西測量設計」
二本松営業所にて

■社員や同業者仲間への応援を受けての事業再開でした
避難していた山形から、遠くは山梨や埼玉、宮城や県内のあちこちに避難した社員たちに連絡を取ると、みんな「仕事をしたい」と。一方、相双地区の同業者からは仕事を手伝って欲しいと声が掛かったものだから、ならば二本松に営業所をと、訪ねた地元の不動産屋さんで、その場に居合わせた大家さんを紹介され、とんとん拍子に拠点が決まりました。あの頃は物件が少なく、全国に避難していた8人の社員を呼び戻すために、社員

寮を確保するのに精いっぱいだったね。借上げは見つからなかったですよ。
その後、親御さんの世話や家族の転居などの理由で5人が退職し、現在は浪江町当時から社員3人に加えて、地元、二本松市で採用した社員が5名で、全社員は8名になりました。
震災以前は双葉郡全域で仕事をしておりましたが、今の現場は相双地区の津波に遭った海沿いが多いです。堤防や道路、田んぼの整備など災害復旧のための仕事の他に、地元である二本松市の仕事も受注しています。

■日々の生活と仕事に追われるようにして、余計なこと考えないようになっています
浪江に帰りたいとは思いますが、住める環境が整わないことには、いつ、どこに、ということとは決めかねます。田尻の自宅は大した被害がなかったし、権現堂にある会社も行くたびに掃除はしています。だけど、果たして戻れるのか。戻ったとしても、手を加えないと生活は始められません。思いはあるけれども、それはいつですか？と私が聞きたいくらいです。そんなことを思うと辛くなりますから、普段は無意識のうちに考えないようにしているのではうね。
また、この二本松の方々にも良くして頂いていますから、もう避難者とは言い難いのです。恩義を感じている分だけ、周りに気を遣ってしまいます。
たぶん、避難している浪江の人たちも感じていると思います。が、これからのことを聞かれても、「今は話したくない」と答える方も多いのではないのでしょうか。ですから、今やるべきことを精一杯やりながら、事業を継続することだけを考えています。



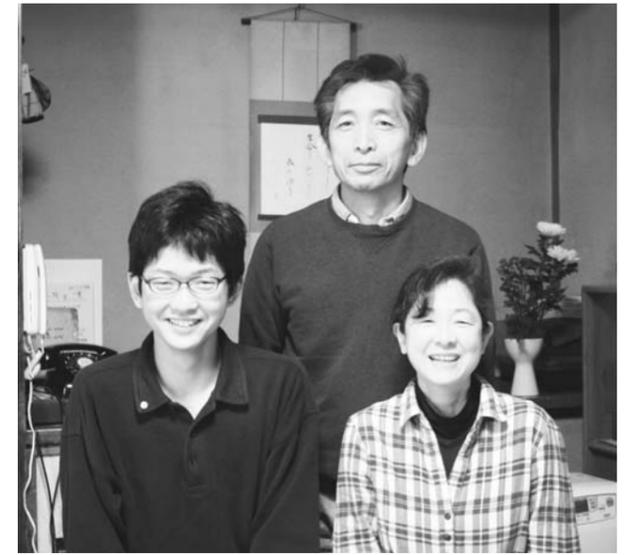
増田 和直さん・維織さん(権現堂)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 清水
取材日：4月13日

未来を見つめて、歩んでいきたい

現在、増田さんは一家で新潟市内に生活しています。家族は徐々に新しい暮らしにも慣れはじめた様子です。

今回は新潟での生活について和直さんと維織さん(息子さん)にお話を伺いました。



▲にこやかに微笑む増田さんご一家

■戸惑った気候や環境の違い
あの3月11日、私は仕事で柏崎に、妻と息子は浪江町にいて、娘は東京で大学受験をしていました。家族がバラバラに行動していたので、それぞれ「無事」の声を聞くまでかなり不安な気持ちになったことを覚えています。その後再会し車中泊や福島島の避難所を経て、ガソリンや物資の心配もあり、両親の実家のある新潟市で暮らすことにしました。移り住んで家族は気候の違い

に戸惑ったようでした。新潟の夏は蒸し暑く、冬はたくさん雪が降る。また浪江町と比べて新潟市は大都会なので、タケノコやみょうがなどを山で手軽に採る：という訳にかず、購入しなければいけないことに驚いていましたね。
■慣れてきた新潟生活
現在は家族も新潟での生活に徐々に慣れてきているようです。都会の良いところとして美術館や博物館、水族館も近くにあって気軽に足を運べたり、外食する際のお店も豊富で、家族で過ごす時間は浪江町にいた頃よりも増えた気がします。息子とピクニックでサッカー観戦もしましたよ。ただ交通の便があまり良くないかな。地下鉄があると便利になると思うんですが、いざにせよ生活の多くの場面で新潟人の優しい気質に助けられ、感謝しています。
■もう一度、帰りたい思い。未来を見つめて
望みを言えば「もう一度あの町に帰りたい」が本音です。もちろん今すぐという訳にはいかなくなりましたが、起きてしまったことは仕方ないので、むしろこれをチャンスに考えて

震災後、本当に多くの方に助けていただいた実感があります。現在は、「今度は自分が人の役に立ちたい」「人の助けになれるような人間になりたい」という思いが強いです。そのためにも高校でしっかり勉強して、自分の思い描く夢を実現できればと考えています。
■人の助けになれる人間になりたいー維織さん
この春、中学校を卒業して高校に進学しました。中学時代はバスケットボール部に所属し、多くの仲間と一緒に楽しい思い出を作りました。顧問の先生やチームメイトのご家族、支えてくれた全ての方に感謝しています。
震災後、本当に多くの方に助けていただいた実感があります。現在は、「今度は自分が人の役に立ちたい」「人の助けになれるような人間になりたい」という思いが強いです。そのためにも高校でしっかり勉強して、自分の思い描く夢を実現できればと考えています。